

原発いらん

経産省前テント広場を訪問し

◇中学生〜八〇代まで◇

テントの前では八

中労委命令の取消を求め行政訴訟が山なす南労会闘争。東京地裁と高裁が舞台です。この目と鼻の先にあるのが、かの「経産省前テント広場」。

一月十三日と二十二日、裁判終了後、支部のカンパを携えて訪問しました。受付名簿に署名し一〇分でも一時間でも座る、それだけでも政府、東電、社会に対して、ささやかな意味はあるか、という思いで…。

◇無期限の占拠闘争◇

テント案内のチラシにはこう書かれていました。テントは今日もこれからもずっと存在し続ける！

〜原発全廃が明確となるその時まで〜

期間限定、昼間の通いという闘いではない、「こんなんは当たり前」の韓国の闘いに近づいていると、心の中で敬意を表しました。野宿者のことも脳裏に浮かびます。雪が何度も降り、とりわけ寒かった冬。夜中は隣の地下鉄駅のトイレも使えないのでコンビニまで

歩いていくそうです。六〇代、七〇代の方も中心で頑張っておられ、トイレが近い人や女性は大変だなと頭が下がります。

◇三日間の国際的闘い◇

一月二四日枝野大臣が退去・テント撤去命令を出しましたが、三日間の反撃の闘いのひろがり一次の様に報告されています。テント前八百名の大抗議集会、八千通を超える抗議メール・電話、三万名の国際署名、フランス元環境相の連帯声明。

◇中学生〜八〇代まで◇

テントの前では八

〇代の女性がマイクを握り脱原発署名を呼びかけていました。何十年も反核を訴え、テントにも日参。杉並から始まった原水禁反対署名運動の話をされ「人事ではないのに

一千万署名の一〇分の一も集まってない。この程度じゃ国は動かせない。みな真剣に考えなきゃ」と、またマイクを握られました。二人の若者がテントの中で「住民投票条例を集めきった、石原や既成政党がどう対応するか」と会話。聞くと何と中学生。

組織を強化拡大し、階級的労働運動の発展をめざそう！

「新聞を見た」と訪ねてきた就活中の大学生も。たまたま四〇年以上先輩の男性がいて熱心な話になりました。

◇双葉町出身の女性◇

福島第一原発のある双葉町出身の女性もテント前で座り込み。お父さんとご兄弟、実家もろとも津波に流され、原発事故の為に捜しに行くこともできなかつたと。連休明けにやっとDNA鑑定で身元確認、遺体安置所で一度だけ対面、後はお骨になって返されたとのことでした。もう存在しなくなってしまう故郷の地名をせめて書き残して

おきたいと、同級生の名前と住所をいくつも控えてきて署名簿に書いておられました。

今は東京に引越しているという原発の地元の男性も通り、尽きぬ話に。

◇右翼の宣伝カーも◇

右翼の宣伝カーが交差点を通過。在特会の妨害による緊張もあるテント。脱原発の思いをもった人々が各々のスタイルで力を出し、交流し、時には批判しあい、つながって、原子力マフィアと対峙する「公共空間」でした。案内には「いつでも訪問歓迎!」とあります。食料その他差入れ、カン

パもOK。東京に行く機会があれば「微力」を「無駄」とは思わずに「短時間でも座込み参加」の気持ちで寄ってみては如何でしょうか。

脱原発実現のためには多くの人々の持続する志と協力が必要です。注目と



上) 「子供を放射能から守れ」
 中央) 「原発再稼働を絶対に許すな」
 右) 「廃炉招福」
 「テントひろば 2月13日 156日目」
 下) 連日マイクで署名を訴える80代の女性

ご支援をよろしく願います。

南労会支部組合員